

## ソリスト・インタビュー 宮下宣子先生に聞く

私たち大宮フィルのトレーナーであり、今回、ソリストとして登場していただく宮下宣子先生に、トロンボーンを始められたきっかけ、これからの活動の抱負などについて、ちょうどひな祭りの時期の3月4日の練習の後、岩槻名物の雛人形がたくさん並んでいるコミュニティセンターいわつきのロビーでお話を伺いました。(聞き手：尾崎正峰)

—今日は、今度の定期演奏会で取り上げるダヴィッドのトロンボーン協奏曲の初めてのオケ合わせでしたが、いかがでしたか。

宮下 楽しませていただきました。トロンボーン奏者であれば必ず取り上げる曲で、オーケストラのオーディションでも課題曲となるくらいにポピュラーですが、それ以外の楽器の人にとってはあまりなじみのない曲ですし、テンポが揺れるところもあるので、オケのみなさんがやりにくいところもあるのかなと感じました。ただ、これから練習を重ねていけば大丈夫だろうと期待しています。



—たしかに私たちもまだ曲に慣れていないところがたくさんありましたが、先生の素晴らしいソロに引っ張られて、何度か合わせているうちに良くなったところもあると感じました。これからがんばりたいと思います。ところで、この曲に対してどんなイメージをお持ちでしょうか。

宮下 ダヴィッドは、メンデルスゾーンがライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

の指揮者をしていた頃のコンサートマスターだった人です。同じ時期に、オーケストラに上手いトロンボーン奏者がいて、メンデルスゾーンに協奏曲の作曲を頼んでいたらしいのですが、忙しくてなかなか書いてもらえませんでした。そうこうしているうちに、オーケストラの同僚のチェロ奏者が亡くなったことをきっかけに、代わってダヴィッドに書いてもらったということです。ですから、この曲は「レクイエム」というか、「追悼」というか、そういう気持ちで書かれた作品なんですね。現世での主人公を描いた英雄的な第1楽章。第2楽章は葬送行進曲、追悼の音楽そのものです。そして第3楽章は第1楽章が再現されますが、これは単なる繰り返しではなく天上における主人公の復活を表しています。ですから、いろいろな演奏のパターンがあるようですが、曲の最後はディミヌエンドで静かに終わるといのが昇天という本来の意味に合っていると思いますし、自分としても納得がいきますね。

### 【大宮フィルとの関わり】

—大宮フィルの金管トレーナーになられたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

宮下 私の兄が大宮フィルの創設メンバーだった関係で、大学生の時に「未完成」のバス・トロンボーンのエキストラとして出演しました(第1回定期演奏会(1979年):聞き手注)。そんなご縁もあってトレーナーとして呼んでいただいたんだと思います。

—大宮フィルの草創期からつながりがあるわけですが、アマチュアを指導することにおいて、ご自分なりの「ポイント」、あるいは、心がけている点など、ありますでしょうか。

宮下 それぞれ個性をお持ちの方々がたくさんいらっしゃいますので、その個性をつぶさないということが私にとっては第一ですね。否定するのではなく、それぞれの方が持っているものの中でいいところを引き出すということですね。それから、プロと違って、毎日練習できるわけではありませんし、お仕事など置かれている環境も違いますから、それらを分かった上で、理論的な説明も交えて効率的な指導ができればいいなというものです。

—トレーナーとして「手応え」を感じるのは、どんなときでしょうか。

宮下 「手応え」ということとはちょっと違うと思いますが、大宮フィルに限らず、アマチュアの方は本番直前になると急にうまくなって、本番が一番いいというのがよくありますよね。そういうのを見ると、うらやましいぐらいですね。集中力があるのかな。

—そう言っただけだと、これからの練習の励みにもなります。

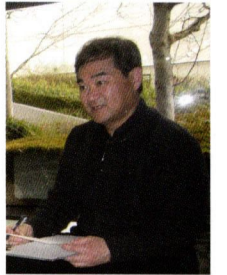
### 【これまでの道のり】

—トロンボーンを始められたきっかけはどんなものだったのでしょうか。

宮下 私が小学生の頃、市川房枝さんといっしょに婦人参政権の運動をやられていた参議院議員の山高しげりさん、その妹さんが主宰されていた謡の会に母が入っていたりしたので、女性の権利についての運動の空気を感じて育っていったんですね。それが、小学校6年生の時、浦和に引っ越してきたんですが、その時の担任の先生が女性だったんですが、「男の子なんだから、これこれ」、「女の子なんだから、こうなさい」ということを決めつけるような先生で、それにすごく反発して過敏になっていました。そして、中学校に入って楽器を何

にしようかというときに「女の子だからフルートはどう?」と言われたのにすごくカチンと来て(笑)、逆に「女っぽくない」楽器を、と思ったんですね。ホルンはどうか、ということもあったのですが、絶対音感があるもので「移動ド」というのがちょっと合わないというか難しくて、トロンボーンならば楽譜はそのままなので入りやすいかなと思って決めました。

—市川房江さん、山高しげりさんという日本の戦後史のひとコマを彩る女性のお名前が出るとは思いませんでした。それにしても、現在とは環境や社会通念がだいぶ違って



いた頃に、女性であ

りながら、どうして音楽大学、将来的にはプロを目指そうと思われたのでしょうか。

宮下 小さいときから音楽をやっていましたが、途中でピアノのレッスンはやめてしまっていたんです。悩み多き中学時代、母がこのままだと不良にでもなってしまうかわないかと心配したんでしょうね。母に連れられてあらためてピアノの先生を訪れたのですが、そこで伺ったのが芸大附属高校のピアノの先生だったんです。その先生には何にも言わなかったのに、「この子は芸大附属高校に行きたいに違いない」と勝手に勘違いされたようです。でも、私はちょっとひねくっていましたから(笑)、いかにもピアノを弾きたくなさそうに弾いたのですが、それを見抜かれて「他にやりたいことがあるんじゃないの?」と聞かれてしまい「トロンボーン」と答えちゃったんですね。そうしたら、「じゃあ、芸大附属高校のトロンボーンを先生を紹介するから」ということで、話が進んでしまったという感じですね。

—今のお話は、ちょっと意外な印象を受けますね。ともあれ、その後、キャリアを積み、日本のプロオーケストラにおける「女性初」の金管楽器奏者となられたわけ



ですが、「初」ということを強調されて周囲からいわれることについて、ご本人としてはどのように受けとめられていましたか。宮下 自分がへまをやったことで「やっぱり女はダメだね」といわれるのではないか、ということについてのプレッシャーみたいなものはあったと思います。自分のせいで、次に続く人たちが何だかんだ言われるようになってはいけないなということですね。責任みたいなものを感じていましたね。

— 私の個人的な感想を含めた比喩的な言い方になりますが、宮下先生が新日本フィルの正式団員となられたことは、女性で金管楽器をやっている人にとって、叶わぬ「夢」でしかなかったものが、がんばれば手の届く「目標」になったことの象徴ではないかと思えます。

宮下 その辺のところは私自身は何とも言えませんが、歴史をひもとけば、有名な画家のフェルメールの絵で女性がトランペットを吹いているものもありますし、他の絵画や版画で見ることができるよう、女性が金管楽器を吹くということはヨーロッパではそれなりにあったのではないかと思えます。ただ、日本では、まだクラシック音楽の歴史が浅いですし、もしかすると軍楽隊とかの影響も残っていて、女性の金管楽器奏者は少なかったのかもしれないですね。

— 最近ではプロ・オーケでも女性奏者の数が増えてきていますね。

宮下 オーケストラも一つの社会と考えれば、男女半々ぐらいになってもおかしくないですね。今では木管楽器は女性の方が多くなるようになってきました。でも、世界的にすごくすばらしい奏者は、まだ男性の方が多く感じますね。

— オーケストラの団員になられてからドイツに留学されましたが、留学時代の思い出として印象に残ることはどんなことでしょうか。

宮下 毎日のようにオペラ、演奏会を聴きに通ったことですね。それは自分にとってすごく肥やしになりました。チケットが安

いですし、毎日のようにいろいろな演奏会がありますから、楽しかったですね。留学先はケルンでしたが、そのとき兄がミュンヘンにいたので、そちらにもよく行って、カルロス・クライバーなんか聴きました。— あのクライバーですか。うらやましいですね。ケルンでは著名なトロンボーン奏者ブラブニミール・スローカー氏に師事されましたが、レッスンはどんな感じだったでしょうか。

宮下 彼は、当時、ヨーロッパの各地で教えていましたが、ケルンにも月に2回ぐらいはみえて、10人ぐらい生徒がいました。旧ユーゴスラビアのザグレブの大学時代、心理学を専攻されていたせいでしょうか、とても生徒の気持ちを察知したような、生徒それぞれに合ったレッスンをしていたと思います。それに、オープンな感じで、「そういうやり方もあるね。僕はこう思うけれどもね。」というような感じで、何か決まったことを押しつけるという事はなかったですね。私はオーケストラの団員としてすでに仕事をしていたので、いわゆる普通の学生とは違うスタンスで接してくれていた面はあったと思いますが。

— 新日本フィルのメンバーとして、数多くの演奏会の舞台に乗られてきたことと思いますが、その中で、とくに記憶に残る演奏会、指揮者、共演者などの名前をあげるとすれば。

宮下 昔の方からたどっていきますと、新日本フィルに入ったばかりの頃の澤征爾さんは、やっぱりすごく、とくにマーラーの第3番や第6番の交響曲ですね。それに、ソリストとしてはマルタ・アルゲリッチ、マウリツィオ・ポリーニ、ジェシー・ノーマン、みなさんすごいオーラがありました。自分を引き上げてくれるという感じで、とてもいい経験をさせてもらいました。それから、朝比奈隆先生ですね。朝比奈先生はもう80歳になられていたと思うんですが、ベートーヴェンの第9交響曲を振られたとき、音楽をしているときの目の輝きがすばらしくて、私もがんばらなければという思いにさせられました。先生は人間的

にもすばらしかったですね。

最近では、アルド・チッコリーニですね。2008年、83歳の時に弾かれたラフマニノフのピアノ協奏曲第2番、特に第2楽章は音楽が天から降ってくるかのような感じでした。うまく聴かせようとか、「自分はいまいでしょう!」とかいうところがまったくなくて、淡々と弾かれているんですが、「ああ、音楽をやってよかった」と思わせてくれましたね。

— ビッグ・ネームがきら星のごとく居並んでいますね。いくつかは私も聴かせていただきましたが、こうした名演は後々まで強く印象として残りますね。オーケストラの活動以外では、一昨年、古楽器（サクバット）によるCD（『サクバットの決意』ENZO Recordings、EZCD10005）を録音され、『レコード芸術』誌においても高い評価を受けましたが、古楽器を演奏するようになったきっかけはどんなものだったのでしょうか。

宮下 何年前になるでしょうか、古楽器のオーケに入って「オルフェオ」（モンテヴェルディ作曲）というオペラをやらせてもらったことがあるのですが、自分でやってきたものとあまりに違って、「何だ、これは?!」と思ったのが直接のきっかけですね。それからいろいろやってきて、古楽器は、まさしく音楽の原点であるということに思い至りましたし、古楽器で勉強したことがモダンにも生きることも感じますね。

— サクバットとトロンボーンとはどんな違いがあるのでしょうか。

宮下 トロンボーンもサクバットも奏法上の基本は一緒です。サクバットの方がベルが小さいとかマウスピースの形状が違ったりとか、見た目違うところはありますが、それと、サクバットは内部構造がより単純なため音程が不安定なところはありますが、音色が細身に柔らかいというのが特徴で、教会など響く会場でやると音の輪郭がよく聞こえますね。

## 【今後について】

— 今までお聞きしたことから、非常に幅広い活動をされてこられたことが分かりますが、これからの活動の構想としては、どんなことをお考えでしょうか。

宮下 今は古楽にはまっています。知らない作曲家もすごく多いですし、やったことのない形態、編成など、自分の知らない世界をこれからも勉強したいなと思っています。日本での西洋音楽は明治になって本格的に広まったので、その時代よりもかなり以前の音楽はあまり伝わって来ませんでしたし、ヨーロッパでさえ一時期、バッハ以前の音楽は、あまり演奏されなかった時期があったようです。しかし、当たり前のことですが、流行（はや）り、廃（すた）りはあってもヨーロッパではずっと昔からつながって音楽が発展して来たので、古楽が持っている良さはそのまま今でも生きていますね。「より大きい音、より高い音、より強い音、または均質性などの機能性を重視する」といった考えとはちょっと違いますね。いろいろ古楽の文法のようなものを学ぶうちに、古楽もモダンも別のものではないということも、最近は強く思うようになって来ました。すばらしい音楽の本質というものは変わらないということでしょうか。

— 最後に、何かメッセージがありましたらお願いします。

宮下 音楽は愛情だというのが私のモットーです。音に気持ち、愛情をこめる。何か人のためになろうとかおこがましく思うのではなく、自分が音に命を入れようと精一杯、一生懸命やっているのを聴いてもらって、誰かに何かを感じてもらえればと思います。やっぱり、音楽ってすばらしいものですから。

— 最後の言葉は、私たちの練習の際にもよくお話しいただくことですが、そのことをあらためて胸に刻んで、本番を少しでもいいものにするために私たちががんばりたいと思います。お忙しい中、ありがとうございました。



## ♪アンコールの曲目について

尾崎 正峰

【トロンボーン協奏曲のアンコール】

### F. クライスラー(1875~1962) 《美しきロスマリン》

「クライスラーの前にクライスラーなし、クライスラーの後にクライスラーなし」とまで言われ、今なお多くの人を魅了し続ける名ヴァイオリニスト。

かなり以前に活躍した人ですから、日本との接点はないように思われますが、実際には、1923(大正 12)年来日し、多くの音楽愛好家感嘆させました。日本のレコード評論の草分けである“野村あらえびす”(1882~1963、“野村胡堂”のペンネームで『銭形平次捕物控』の作者)が、その古典的名著『名曲決定版』(現、中公文庫)の中で、医者注意を無視して帝国劇場での5日間の演奏会に通り詰めたために命を落とししかけた(その後、4カ月の入院)けれども、命を賭けて聴く甲斐があったとまで言わしめるものでした。

この時の演奏会の「特等席」の値段は15円(当時)だったそうです。10年ほど後になりますが、1933(昭和8)年で、米1升の値段が25銭、高価な桐タンスが30円(『家計簿から見た近代日本生活史』東大出版会、1993)。また、庶民の憧れであった「文化生活」を営んでいくための生活費が月25円程度(田崎宣義編著『近代日本の都市と農村』青弓社、2012)。チケットの値段がいかに高かったのかがお分かりになるとと思います。

クライスラーの演奏スタイルは優雅という言葉が似つかわしいものでしたが、作曲家としてもその特質そのままの才を示しました。ベートーヴェンとブラームスのヴァイオリン協奏曲のカデンツァはヨハヒム版と並んで名作とされ、今なお多くのヴァイオリニストが用いています。しかし何と言っても、ヴァイオリンのための小品を数多く作曲したことを忘れることはできません。『愛の喜び』、『愛の悲しみ』、『中国の太鼓』、『ベートーヴェンの主題によるロンディーノ』等々、いくつもの題名をすぐに思い浮かびます。

「美しきロスマリン」は、もっとも有名な小品のひとつです(とある弦楽器の専門雑誌の最近号で、内外のヴァイオリニストにクライスラーの作品についてインタビューをする記事がありました。多くの方々がお気に入りの曲として、この作品を取り上げるということでした)。タイトルの「ロスマリン」は、少女の名前とも言われたりしますが、花の名前では「ローズマリー」の言い方がなじみ深いでしょう(日本名は「まんねんろう」)。花言葉は「思い出」「追憶」「静かな力強さ」などだそうです。

【オーケストラのアンコール】

### P. I. チャイコフスキー 「祈り」

(組曲第4番ト長調 作品61 《モーツアルティアーナ》第3曲)

チャイコフスキーは、「単純さと深遠さとを結びつけるやり方が神秘的でさえある」という最大級の讃辞を送るほどモーツァルトに心酔していました。その証が、モーツァルトの作品4曲を編曲してまとめた《モーツアルティアーナ》(「モーツァルト名句集」ぐらゐの意味です)のタイトルを持つ作品です。スコアの表紙の裏面に「簡素な形式ではあるが、十分得難い美しさをも



った珠玉のような作品が、よりしばしば演奏されるための新しい糸口を与えることを期待」して編んだ旨を綴っています(『チャイコフスキー』音楽之友社、1993)。1887年11月の初演は大成功で、とくに、モーツァルトのモテット《アヴェ・ヴェルム・コルプス(Ave verum corpus)》K.618のリストによるピアノ編曲版を元にした「祈り」というタイトルがつけられた第3曲はアンコールを受けたそうです。

原曲が作曲されたのは、さかのぼることほぼ100年の1788年。モーツァルトにとって最後の年となりますが、この年、妻コンスタンツェは前々年、前年に続いてバーデンに療養に出かけました——経済的に困窮していた時期にさらなる出費。このように、コンスタンツェは浪費家で、「悪妻」の代名詞のように語られてきましたが、結婚を機にモーツァルトが家長としての意識に目覚め、成熟した音楽を生み出すようになったことの一助としての彼女の存在を(再)評価する向きもあります——。療養にあたって部屋を借りてもらうなど世話になったのは、地元の合唱指揮者アントン・シュトル。彼への感謝の意を表するために送ったのがこの作品です。言ってみれば、この曲にはモーツァルトの妻への愛情が込められているわけです。

モーツァルトによる原曲は、混声四部合唱と弦楽器とオルガンだけの簡素な編成で、わずか46小節しかありませんが、これ以上音楽で透明感を表現することはできないほどの至高の美しさを示す作品です。対するチャイコフスキーの編曲も、弦楽器を主体に木管楽器のハーモニーとハープを効果的に用いた素晴らしいものです。

本日のプログラムは、奇しくも3曲とも、しずかに終わるものでした。意味合いはそれぞれに異なるにしても、いずれも神、あるいは人知を超越したものへの祈りや畏怖の念を感じさせるものといえると思います。というわけで、そのテーマに通じるものとして、そして、演奏会の最後を締めくくる作品としてふさわしいものと考えて、この曲をお届けします。

**本日は、ご来場いただき、まことにありがとうございます。**

**お気をつけてお帰り下さい。**

**次回演奏会のお越しをお待ちしております。**

**(大宮フィルハーモニー管弦楽団 一同)**



**< 第35回定期演奏会のお知らせ >**

2013年5月26日(日) 埼玉会館 (JR「浦和駅」下車)

指揮:石毛 保彦

G. マーラー

交響曲第1番「巨人」

G. ガーシュイン

ラブソディ・イン・ブルー

L. バーンスタイン

《キャンディード》序曲